

# 聴覚障がい学生在籍クラスでの語学授業実践報告

— その工夫と課題 —

How to Better Serve a Class with a Hearing-Impaired Student-Devices & Challenges

大池 京子

本稿は、平成20年度札幌学院大学一般教養英語講座で一年間に亘り試みた聴覚障がい学生在籍クラスでの英語授業実践の報告と、その後継続された研究の分析から、今後の課題をまとめたものである。当該学生に授業保障をすることと、個々の学生の成長を目指し、教師は試行錯誤の中、劇的に授業スタイルを変えて対応した。本稿は、1) 聴覚障がい学生在籍クラスで英語を教える為に試みた授業方法の工夫と課題、2) 英語科教員と関係部署の協力を基に今後の聴覚障がい学生の英語教育に関して一連の対応計画と授業展開の方向性を、学生からのフィードバック、質問紙、面談を基に探るものである。

キーワード 聴覚障がい 英語教育 授業保障 支援体制

## I. 研究の発端

平成20年4月、私は新学期の教室で初めて教室の一番前に少し緊張気味に、両脇のノートテイカーさんと共に座っている彼女と出会った。そこで初めて、担当する学生の中に聴覚に障がいを持つ学生が在籍していることを知った。既に「今年度は音声言語としての英語に力を入れて指導しよう」と教材選択をし、シラバスを作成し終えていた私は、少なからず動揺した。

クラスには23名（男子22名、女子1名）の学生が在籍していた。英語の力には幅があったが、率直で快活な学生の集団で、有難いことに、互いを尊重し支え合う雰囲気は当初から見られた。学び支え合う集団形成にと、Rapportを築く為の活動Charadeを交えた自己紹介では、明るい笑い声の中、全員が楽

しく互いの趣味を言い当てていた。時に日本語も駆使しながら、ペアやグループ活動に積極的に取り組んでくれるClass Dynamicsを頼りに、講座は楽観的にスタートした。

その後関係部署から、聴覚障がい学生への講義保障に関する資料を頂いた。当時私は、彼女の障がいの程度や、聴覚障がい学生への英語教育の方法等、ほとんど何も知らなかった。ただ「障がいの為に、また教師の未熟さの故に学生に不利益を与えてはいけない。」という思いは強くあった。それは、大学院留学中に視覚障がいの同級生が、点字と彼女の鋭い聴覚で見事に学業を修めていた姿や、これまでの聴覚障がいのある方々との交流経験に加え、文献で読んだ“…our ability for language is innate, regardless of handicap”（人は障害の有無に拘わらず生まれながらに言語を獲得する能力を備えている (Lorrain & Mare, 2003) という研究者達の確信に支えら

れたものだった。早速、大学の同僚・先輩教師に聴覚障がい学生の在籍するクラスでの英語教育の方法について、広く経験や情報を求める中、授業方針が決まった。1) 聴覚障がい学生の学ぶ権利・講義を保障し、2) クラスの生徒全体の成長を目指すことであった。これは、生徒一人ひとりに分かり易く、成長を促す授業となるよう、自分の授業を見直し再構成する機会ととらえた。そして関連分野の資料を探しつつ授業を展開する日々が始まった。

この試論は、1) 聴覚障がい学生在籍クラスでの語学授業に対し行った私の試みは、当該学生やクラスの生徒全体にとって役立っていたのか検証を試みるとともに、2) 聴覚障がい学生在籍クラスでの語学授業に関して、具体的な学習支援事例を持ち寄り、積み上げ、今後のより良い学習支援体制作りに役立てて頂くことを目指したものである。

## II. 試行錯誤の授業実践

クラス全員の成長を目指す、と方針を固め、以下の5点を当面の実践・研究の視点に立てた。1) 聴覚障がい学生に分かり易く英語を教える為に授業方法をどのように修正できるのか、2) 聴覚情報をできるだけ視覚情報に置き換えて提示することは当該学生のプラスになるのか、3) 当該学生、ノートテーカーと教師間の連携を深めることで、より良い学習支援ができるのではないかと、4) 授業スタイルの修正は、クラスの生徒全体のプラスにつながるのではないかと、5) 英語科教員と関係部署の協力を基に、聴覚障がい学生の一般教養英語教育に関して一連の対応計画と授業展開の方向性を作ることができるのではないかと。

試行錯誤の中、授業スタイルに劇的な変化が生まれていった。まず、1) 聴覚情報をできるだけ視覚情報にして提示することに努めた。中心教材は中級レベル学習者向けの Eng-

lish Fast Lane (成美堂, 2006) で、音声言語としての英語学習方法を展開し、4技能(聞く・話す・読む・書く)をバランスよく鍛えるもので、随所にCDリスニング (TOEIC Listeningを含む)箇所があった。その為、最初は Listening 箇所のスクリプトを書き起こし、加工して当該学生に渡したが、後に出版社の温かいご協力のもと、テキストの電子データを頂き、以後はそれを加工して配布した。また、通常ワークシートを配布し、授業中に語いの発音 (アクセントを含む) や意味の整理をしたり、ディスカッションに向けて自分の意見を予め書いてきてもらうのだが、コンピュータ配備の講義室の利点を活かし、OHC(教材提示器)を活用し、クラス全体に、今、テキストやワークシートのどこをやっているのかを示した。

授業のポイントや教師の説明が直ぐにイメージし易いように、黒板全体を大きく何箇所かに分け、ページや見出し、課題や連絡事項を書き出した。発音指導の際は、黒板へのイラストやジェスチャーで place of articulation と manner of articulation (調音の位置と様態) を示した。

また、当該学生の口読理解支援として、学生達に話す際には、黒板に板書しながらではなく、できるだけ当該学生の前か付近に立ち、教師の口元が見易い位置で明瞭な音量で話したり、発音するよう努めた。この位置だと、Note-takerさんのテイクの状況を確認できるので、当該学生がどこまでテイクを読めているか見ながら、順に学生達を指名できた。また、教師の話をノートテイクし終えるまでのタイムラグの間にブロック毎に机間巡視をして、個々の学生をサポートするようにした。通常、授業では一つの内容について、シンプルな英語で2回語った後、理解度を確認する意味で、日本語で1回同じ内容を語るようにしている。

さらに、予め授業の流れを大まかにつかめ

るようにと、その日の授業のアウトラインと場面毎の key question を書いたものを当該学生に先渡しするよう努めた。

次に、2) 当該学生やノートテイクーさんと連携をとり、フィードバックをもらい、より良い授業支援につなげたいと思い、授業後数回短く意見を聴く機会を設けた。学生は「さ」行と「だ」行の発音をしづらいことが分かった。また、普段大学のポータルサイトで、クラスの全学生に向けて講義情報連絡等、授業支援をしているのだが、個人伝言機能を活用して、当該学生やノートテイクーさん達と双方向の発信ができるように設定した。

授業実践をしながら、並行して関連分野の研究や資料探しを少しずつ進めていた。大学バリアフリー委員会の資料、PEPNET-Japan の Website、リンク先情報に加え、当時参加していた本学英語教員による Study Group での実践交流も心強かった。

しかし、学生の聴覚障がいの程度も、聴覚障がい学生への英語教育に関しても分からないことを沢山抱えて、当該学生やテイクーさん達からの Feedback が少ないこと、突発的な口頭での補足にテイクが追いつかず、学生が情報を待っている間に時々居眠りをしてしまうこと、また、やりがいを感じながらも、常に授業を2つのモード（聴覚と視覚情報）で準備するという時間的葛藤等の悩みがあった。

音声指導の難しさ・失敗の半面、発見したこともあった。暫くの間、学生達に配布するワークシートの語いに、IPA (国際音標文字) の発音記号を補助的に書きこみ、Phonics の手法を取り入れて難しい発音の指導をしていたが、ある時、当該学生のワークシートにカタカナで発音補助表記をしたところ、音量がぐんと増したのが分かった。その時初めて、当該学生がこれまでカタカナを使って英語の発音を習ってきたことを知った。実はそれまで、「いつから、また何故聴覚障がいを持った

のか」を尋ねると学生を傷つけてしまうのではないかという思いから、障がいの程度や内容の正確な把握もできていなかった。情けないことだが、ここにきてようやく、生まれながらの聴覚障がいの為に、日本語の調音を習得する年齢の頃に、それが的確にできなかった為、発音が不明瞭になっていることによりやく気がついたのである。そうした教師のおぼつかない状況認識ではあったが、当該学生は課題にいつも真摯に取り組み、また大変積極的に声を出し、ペア活動やグループディスカッションに取り組んでくれていた。4人編成のディスカッションの際には、しっかりと自分の意見を述べ話し合いに貢献する姿に、クラス全体が良い刺激を受け、真剣に学ぶ姿勢に感動を覚えている様子が学生達の表情に見て取れた。

補助教材・活動として、シラバスに沿って折々に Asahi Weekly 英語版の記事や、英語の歌、また定期的に本学の E-Learning System (Open Language Laboratory) 等を取り入れ、学生がマイペースで苦手な文法項目に取り組み、TOEIC 練習に向かうよう一年を通じて奨励した。

授業準備の際、より音声をとらえたり内容をつかみ易くなるように、クラス全体に配布する Summary Completion シートやワークシートに補足情報を書き加える等、資料にも変化が表れてきていた。また、当該学生のテストのリスニング箇所には、カタカナで補足表記を加えた。

折々の授業終了時に「The Minute Paper」(Anderson, 2007) の形で学生から feedback を得て個々の学生の授業理解度の点検や学習支援の方向を探るツールとした。以下に計5回のうち特徴的なものを載せることにする。

### III. 学生達からの Feedback

1) 当該学生 4/18-リスニングは目で見るとしかできないが修正液で穴埋め箇所を作った

プリントを作ってくれと助かる。(以下要旨)

5/9-1. 今日の授業で最も印象的だったのは, 歌 True Colors を聴いたこと. 2. 最も難しかったのは, 歌詞を発音したこと. 3. 次回やってみたいのは, もう少し英語を覚えたい.

2) 他学生 4/18 (20名出席)-A) ペースは丁度良い(4名), 授業が分かり易い(6), リスニング練習が難しい(4), 感情について話合った授業は有意義だ(1), CD を使った授業は良い(1). B) もっとリスニング力を磨き, 英語力をつけたい(2), 楽しく英語を学びたい(3), 英語を自分の暮らしの身近に感じたい(1), ひいきしてほしい(1), もっと授業を易しく, 分かり易くしてほしい(3), アニメのような面白いものを使ってほしい(2), 分かり易い読み物を使ってほしい(1), 文法を学びたい(1). 5/9 (20名出席)-1. (印象深いこと) True Colors を聴いたこと, 良い歌だ(9), Summary を完成したのは初めての経験だ(2), TOEIC Listening 練習は難しかった(1), 英語の難しさを再確認した(1), 一生懸命取り組み, 沢山参加した(1), 黒板に出て板書したこと(1).

-2. (難かしかった点) True Colors (3), 英語で要旨を完成したこと(2), T/F Qs は紛らわしく, パッセージ内で答えをスキャンしづらかった(8), 長い読み物を読み, 理解すること(4), Preview 箇所や Main verb に下線を引く作業(2).

-3. (次回に向け) もっと単語を覚えたい(4), 英語を覚えたい(3), リスニング力を伸ばしたい(3), 真面目に課題に取り組む(2), 授業参加を頑張る(以下各1), Reading と Writing, もっとスムーズに読みたい, TOEIC Listening 練習, 体調管理, 遅刻しない, 発音.

また最終講義時 (1/9) に講座全体に関して3つの角度から簡単なアンケートを取った.

1. E-learning System (OLL) は役に立ったか,
2. Portal site での支援は役立ったか,
3. 講座満足度について, 5段階(5が最高)

で評価し, 自由記述でコメントを求めた. 一人の学習者に焦点を置いた設問は避けるべきだと判断し, 上記の項目にしたが, 授業スタイルがクラス全体にどれくらい有効だったかを探る為には, 「授業は分かり易く, 力をつけるものだったか」という設問をすべきだったかと思われる.

1) 当該学生-1. OLL の有用性は3. 部分的にやってみただけだが, 分かり易いプログラムだった. -2. ポータルサイトは2. 講義連絡等メッセージは携帯にも送られてきたが, 気付かずチェックしないことも多かった. -3. 満足度は4. 自分は教師や他の学生と協力して学習したので良かった.

2) 他の学生 (出席20名) (無回答あり)

評価	1	2	3	4	5
1. OLL	1(人)	6	4	8	1
2. Portal	1	3	3	6	4
3. 講座				3	

-3 (コメント) (1人で複数書いた学生あり) 授業が楽しく, やり易くてよかった(8), もっと出席を頑張りがかった, 体調に気をつけたい(3), 遅刻が多かった, 反省(2), 分かり易く学べた(2), なかなか面白かった (以下各1), 遅刻の為に講義ペースについていけず理解不足につながった, 久しぶりにちゃんとした英語の授業を受けた気がした, 頑張ったので勉強も結構できた, これからも頑張っていきたい, 毎朝憂鬱で起きられなかった, 全体的に普通, 黒板の字をもう少し大きくして, それ以外は良い, 長いようで短かった.

#### IV. 改めて実践を振り返る

講座終了後も, 英語教師として未解決の疑問点が幾つも残っていた為, 2009年3月にアメリカで開催された TESOL 学会 (英語教育関係者の最大規模の国際学会) にその答えを求めて参加したが, 残念なことに同様のテーマのセッションは一つのみで, また参加者も少なく交流は限られたものに終わった為,

メーリングリストで交流を続けていった。

改めて9月に、大学バリアフリー委員会担当新國先生と連絡を取る中で、実践をもう一步深く見詰め、聴覚障がい英語教育の在り方について再び学ぶ機会を得たのである。

とりわけ聴覚障害英語教育研究会の須藤会長による本学での講演(2006)や同会 Website, PEPNET Japan 作成のFD用DVD「Access」には、生まれつき難聴の学生の聴こえと調音の関係等、担当教師として知っておくべき重要な点が沢山示されていて、研究の大きな原動力となった。分析の手法として、当該学生への面談と質問紙、ノートテイクさんへの質問紙調査をした。約1年を経過しての追跡調査の為、授業の様子を想起し易いよう詳しく解説し、また、4名の担当テイクさんのうち、在籍しているテイクさん2名への依頼となった。

〔当該学生へのアンケート質問項目要旨〕

Q1. 教師の授業支援方法について

授業中は、視覚教材の活用——A) 板書(イラストを含む)、B) 教材提示器(OHC)、C) Worksheet(聞き書き)や発音のカタカナ表記入り)、D) 当日の授業の流れや、Key Questionを書いたメモの先渡し、E) TOEICのリスニングで流れる原稿を配布——という対応をしましたが、率直にこれらはあなたの授業理解に役立ちましたか? 不必要と感じたものはありましたか?

Q2. 授業内容(形態)について

音声言語としての英語に焦点を当て、(聞く、話す、読む、書くの4技能を)総合的に伸ばすことを目指したシラバス(授業計画)だった為、A) 語いの発音やアクセントのチェック、B) ペアワーク、C) グループでのミニディスカッション、D) CDリスニング(歌詞も含む)等の活動がありました。また、E) OLL(オンライン教材)を使って文法の基礎を復習するセッションもありました。これらの活動への参加は、容易でしたか? 難しく感

じた点はどんな部分でしたか?

3. 教師とのコミュニケーションについて

私は少しだけ手話を習ったことがあります。が、まとまったことを意思疎通できるレベルではなく、授業中の教師の説明はノートテイクさん達のサポートが大きな力でした。あなたが意見を発表したり、質問をしたり、要望を伝えるうえで、教師とのコミュニケーションはスムーズでしたか? 困ったことはありませんでしたか?

4. 小中高校を含むこれまでの学校生活の中で、授業においてこんなサポートがあったので、とても理解し易かったとか、こんな活動形態(ペア、グループなど)で学ぶことの楽しさを味わった、といった経験があれば、教えて下さい。

5. 最後に、あなたがこれから社会へ巣立っていくことを踏まえ、聴覚障がいを持つ学生へのサポートに関して大学・教員側への意見や要望など、どんなことでも率直に書いて下さい。

〔テイクさん用アンケート質問項目要旨〕

Q1. 教師の授業支援方法について

(左のQ1. Eまで同じ)これらの工夫は、担当した学生の授業理解に役立っていると感じましたか? また、ノートテイクや手話通訳をするうえで、やり易かったり、逆に難しいと感じた点はありましたか?

Q2. 授業内容(形態)について

(左のQ2. Eまで同じ)担当した学生がこれらの活動に参加できるようにノートテイクや手話サポートをするうえで気づいたことはありますか? 難しいと感じた点はありますか?

Q3. 教師とのコミュニケーションについて

(左のQ3. 前半同じ)授業中の教師の説明はノートテイクさん達のサポートに大きく助けられていました。担当した学生が意見を発表したり、質問をしたり、要望を伝え、教師とコミュニケーションを図るうえで、ノート

テイカーさんとして何か気づいたことはありますか？

Q 4. 最後に、聴覚障がいを持つ学生へのサポートに関して大学・教員側への意見や要望など、どんなことでも率直に書いて下さい。

以下7ページ目にアンケート結果と考察をまとめる。

## V. 今後への課題

当該学生やノートテイカーさん達のもう一步深い本音と、複数の聴覚障がい英語教育支援の輪との出会いから得た視点で、再度これまでの実践を振り返った時、いくつか重要な課題が見えてきた。それは、1) 大学側に(聴覚)障がい学生が在籍すること、障がいの内容と程度を的確且つ早期に、担当教員に伝える連携体制を作って頂きたいということである。告知とともに、参考資料として、大学のストーリーミングシステムに既に配信されている素材「聴覚障がい学生への支援に関する研究講演」(須藤, 2006)や、DVD「Access」の存在を担当教員に周知し、視聴を促すことで、教員はより早く的確に障がいの本質を理解し、支援の必要性を納得し、よりの確な調音(発音)を含めた英語教育を提供できるであろう。実際、当該学生が生まれつきの難聴で、ある周波数以下の子音を聞き取れないと分かったのは、この3月に筆談を交えてインタビューをした時であった。障がいの本質を教師が知らなかった為に、学生に随分無理をさせていたのではないかと反省した。次に、2) 英語科の教員が協力して、聴覚障がい学生への英語教授法を少しずつ研究・実践・交流し、積み上げることで、ある程度個々の学生の障がいのレベルに対応した本学としての英語教育の方向性を作りあげていけないかということである。障がいの程度や内容を踏まえ、4技能が密接に絡み合う語学(英語)教育において、どんなmethodを用いて、どこに当該学生の学習目標を設定したら良いのか、

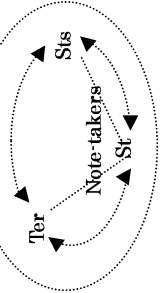
より客観的な洞察に基づくカリキュラム試案作りが必要ではないだろうか。例えば、ListeningをReal Time Captioningで携帯画面に字幕(視覚情報)として瞬時に送ることで、ノートテイクを待つタイムラグ問題も随分解消されるだろうし、リスニングを速読に置換えて訓練する方向も拓けるだろう。Speakingは、e-mailやchatの様なより即興的なWriting(production skill)に変えて表現させることも可能だろう。或いは、やはりSpeaking skillとして、カタカナ発音を活かして発音、発話させるのか、または、(指導者の体制も大きく関係するであろうが)例えばASL(アメリカ手話)かJSL(日本手話)で補足させつつ簡単な会話をできるように指導していくのか等、幾つか選択肢があるだろう。もしListening等の特定のスキル分野を代替活動に特化する場合も、そのRationaleや具体的な方法(例えばPPTで速読等)の議論が大切であろう。いずれにしても、学生が将来社会に出た時を想定して、どんな力をつけることが自立へのより良い準備になるのかという視点から、英語科として議論を深めることが必須と思われる。

## VI. まとめ

振り返ってみて、障がいの有無に関係なく、個々の学生が対等に学び合える学習環境作りを目指した時、少しずつではあるが着実に、誰にとっても分かり易い授業提供に近づいていたように思われる。

このクラスでの一つの挑戦を何とか最後まで続けてこられたのは、あの個性豊かな23人がいたからだと思う。共に学び支え合うLearning Communityがあり、体験を語り、意義を感じ、課題に取り組む中、それぞれの生徒が成長していった。今彼女は以前からの目標だった特別支援学級の教員を目指し、日々着実に自分の課題に取り組んでいる。

【聴覚障がい学生とノートテイカーさん達へのアンケート結果】

Q	聴覚障がい学生 A.さん	ノートテイカー I.さん	ノートテイカー Y.さん	改善へ向けて試案
1	<p>板書(含むイラスト)、OHC あった方が、テイカーさんのアレクサやアークセメントが少しかかり易くなくて済んだし、「今どこをやってる?」とか分かり易くてスムーズに進められたと思います。また、授業の流れや発音のカタカナ表記入り等も教えてくれて大変に助かったです!しかし、アークセメント(発音)なぜこうなるのかは、ちょっと理解できなかったのかなと思います。</p>	<p>リスニングの原稿を配布して頂いたことは、学生にとっても良かったと思います。口頭説明だけでなく、細かく板書してもらったので分かり易かったです。細かいです。ただ、次に何をすればよいか、上手く伝わってないことが何回もありました。</p>	<p>視覚教材の活用は授業理解に役立ったと思います。しかし、リスニングで流れる原稿の配布は、ただ指でなぞることしかできません。これでよいのだろうか、と疑問に思う部分もありました。</p>	<p>改善へ向けて試案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>visual aids</li> <li>耳→発音 カタカナ介入? ASL/JSL → Engへ? Phonics</li> <li>指示後、間を置き確認を</li> <li>リスニング→速読等へ?</li> <li>2 modes</li> <li>表現← write &amp; say with ティーカー's help?</li> <li>リアルタイムキャプション?</li> <li>タイムラグを活用</li> <li>英語母語話者教師の授業のノートテイカーは?</li> <li>Listening → 代替へ?</li> </ul>
2	<p>話の発音やアークセメントのチェットが1番難しかったです。何故なら、聴覚障がいを持つ人には、発音のアクセントをつかむのが大変だからです。どういふ感じで発音すればいいのかわかりません。問題が解くくらいは大丈夫でしたが、リスニングもちょっとあった気がしますが、その部分は聞けないので、ボーナス得点もえらむという事で私にとっては不便なあと。</p>	<p>発音やアークセメントのチェットは、事前にしっかりと説明をしないと、難しいように感じました。ディスカッションでは、他の学生さんの協力もあったので、非常に助かりました。</p>	<p>ペアワークやグループディスカッションでは、周りの学生さん達の助けもあり、スムーズに参加することができていました。思い返すと、発音の際は、どうしても皆より遅れてしまうので、こちら側でも何か工夫をしなければならぬと感じました。</p>	<p>個人的な意見ですが、Aさんは先生の授業支援に満足(?)しているように見えました。ノートテイカーや、聴覚障がい学生を理解して下さったと思っています。ありがとうございます。</p>
3	<p>少しだけ手話ができるのなら、わかる手話だけでもよいので、手話を使ってくれたら、嬉しく思います。また、ジェスチャーでも口を大きく開けるでも、いろんな方法があるので、積極的にいろんな方法を使いながらコミュニケーションをとれば、スムーズにできると思います。</p>	<p>よく学生に何かを伝える時に、通訳するテイカーを見て話す先生がいらっしやいます。先生の目を見て、学生に話しかけて下さったので、学生としては嬉しかったと思います。</p>	<p>個人の意見ですが、Aさんは先生の授業支援に満足(?)しているように見えました。ノートテイカーや、聴覚障がい学生を理解して下さったと思っています。ありがとうございます。</p>	<p>当該学生の立場になって支援を Learning community/team を</p>
4	<p>中学の時、サポートとしての先生が私の隣に居てくれて、ノートテイクのように、要約してもらいました。(思ったように、ノートテイクのようにいかなかったけど) 高校の時、特別学級がなかった為、サポートとしての先生がいないので、その代りに仲の良い友達ができてきたところは(先生から頂いたメモ帳に)してもらいました。</p>	<p>ビデオなど映像教材を使用する場合は、字幕を入れて頂けると非常にありがたいです。また、話をする際は、速くなり過ぎないように気をつけて頂けると助かります。教職員の方だけでなく、同じ教室にいる学生、又は外部から来られる講師の方にも、話しの手速さや、聴覚障がい学生、テイカーがいいることを事前に伝えてほしいです。テイカーは受講生ではないので、基本講義には参加しません。テイカーはテイクに集中している状態で、あてられたりすると満足な情報保障ができなくなる場合があるので、配慮して下さると嬉しいです。時々ですが、教員自身の発言を「それは書かなくていい」とおっしゃる教員の方がいます。その情報は必要とするか、解いて頂ける点も沢山あります。その点を理解して頂いている点も沢山あります。しかし、配慮しています。ありがとうございます。今後とも宜しくお願いします。</p>	<p>大学の教職員全体がテイクについて理解しているかどうかは分かりませんが、声が小さかったり、ごまごま話しているところなどどうしても聞き取りにくい部分があり、途中でテイクが止まってしまうこともありました。また、ネイティブの先生の授業は、まだまだ難しい点もあるので、私たち自身、改善が必要だと思っています。</p>	<p>テロップ(字幕) 入れ支援の活用を</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>話者の話すスピード調整</li> <li>資料の前渡しや音声個別指導?</li> <li>ニーズをその都度伝え合い、改善を積み上げていくプロセスと仕組み作りへ</li> </ul> 
5	<p>サポートして欲しいことは、やはり「発音のアクセント」が1番かなと思います。テイカーさんが耳の代わりにテイクをやってもらいますが、英語が特に難しいので、授業の前の日でも、発音のアクセントを書いたら、とても助かります。なぜなら、先生が英語で言ったことを真似て学生が英語で発音しなくてはならないこともありますが、聴覚障がい学生にとって、他の学生のように追いつかないので、とても困っています。</p>	<p>リスニングの原稿を配布して頂いたことは、学生にとっても良かったと思います。口頭説明だけでなく、細かく板書してもらったので分かり易かったです。細かいです。ただ、次に何をすればよいか、上手く伝わってないことが何回もありました。</p>	<p>個人的な意見ですが、Aさんは先生の授業支援に満足(?)しているように見えました。ノートテイカーや、聴覚障がい学生を理解して下さったと思っています。ありがとうございます。</p>	<p>当該学生の立場になって支援を Learning community/team を</p>

DVD「Access 2」の中で、明治学院大学の  
中野敏子先生が、成長した卒業生を前に、視  
覚障がいと聴覚障がいの学生が同時に在籍す  
るゼミを担当した当時を振り返ってこう語っ  
ている。「障がいは、時にはその人の生き方さ  
えも変えなくてはならないような重い意味を  
持つ。(中略) だからこそ、(自ら申告して)  
本気で受けた支援体験は、障がいを持つ学生  
の将来のエネルギーになり、社会に出てから  
も湧いてきて、自ら主体的に何かをしようと  
する際の力になる。」と。

これからも学生達の心の滋養となり、やが  
て社会に出た時に自ら発信し切り拓いていく  
力となるような良き支援、授業実践を目指し  
一歩ずつ歩みを進めていきたい。

## References

- 「Access! 1&2」(2009) 聴覚障害学生支援 FD 教  
材 DVD シリーズ PEPNet-Japan  
馬場こずえ(2006)「日本福祉大学における聴覚障  
害学生英語授業への取り組み」Retrieved on  
February 28, 2010 from [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/kyouinshien.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/kyouinshien.pdf)  
聴覚障害英語教育研究会 ウェブサイト (2000)  
<http://deafeng.spaces.live.com>  
「聴覚障害学生自身を育てる視点, 他」(2006)  
宮城教育大学ウェブサイト障害学生支援プロ  
ジェクト資料: 50-80「第5回日本聴覚障害学  
生高等教育支援シンポジウム報告書」(2009)  
PEPNet-Japan.  
ディーリ, J.K.・都築繁幸・土谷道子 (1994)「筑  
波技術短期大学聴覚部における英語教育の実  
際」Retrieved on March 10, 2009 from [http://www.tsukuba-tech.ac.jp/repo/dspace/bitstream/10460/220/1/Tec01\\_0\\_17.pdf](http://www.tsukuba-tech.ac.jp/repo/dspace/bitstream/10460/220/1/Tec01_0_17.pdf)  
長谷川晃子 (2010)「宇宙からの第一声を手話で」  
『ISAS ニュース』No.347  
石田久之(2006)「はじめて障害学生を受け入れる  
にあたって」『平成 18 年度障害学生修学支援セ

- ミナー報告書』JASSO: 34-46  
Johnson C.R (2009) EFL and the Deaf:  
Teachers Making a Difference, *Essential  
Teacher*, June: 16-19  
「情報保障の手段, 授業における教育的配慮」  
(2006) PEPNet-Japan  
「講義の「字幕」携帯に聴覚障害の学生支援」  
(2009) 読売新聞 Retrieved on March 10,  
2010, from <http://www.yomiuri.co.jp/...20090909-OYT8T00201.htm>  
「高等教育に学ぶ障害者への配慮と学習支援」  
(2002) 福岡教育大学ウェブサイト Retrieved  
on March 4, 2010 from <http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~tomiohta/SCS/h14/scs0211.htm>  
Lorraine, C.S. & Mare, N.N. (2003) Language:  
Is It Always Spoken? 「言葉, それはいつも話  
されるものだろうか?」 *Issues for Today* Ch.  
4, 60-62 Heinle  
Marks, J. 「アメリカ合衆国の高等教育機関にお  
ける障害学生支援サービス」Retrieved on Feb-  
ruary 28, 2010 from <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/social/ussudents.html>  
松原崇 (2006) 「教員支援」平成 20 年度障害学生  
修学支援 コーディネーター養成講座 JASSO  
Retrieved on February 28, 2010 from [www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/kyouinshien.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/kyouinshien.pdf)  
松藤みどり (2002) 「三国聾学生国際交流 PEN-  
International 親善大使の中国訪問」『聴覚障  
害』2002 年 6 月号 Retrieved on July 25, 2010  
from <http://www.normanet.ne.jp/~ww100114/library/li-36.htm>  
Mole, J., McColl, H. & Vale, M. (2005) *Deaf  
and Multilingual: a practical guide for teach-  
ing and supporting deaf students in foreign  
language classes* 「聴覚障害と多言語使用: 外  
国語授業において聴覚障害学生を支援し教授  
する為の実践的指針」Direct Learn Services.  
Ltd



- 長田こずえ(2007)「アメリカの聴覚障害者へのサポート事情②」 Retrieved on March 4, 2010 from [http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n197/n197\\_070.htm](http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n197/n197_070.htm)
- 小田候朗「手話の活用：障害のある子どもの教育について学ぶ」 Retrieved on March 5, 2010 from [http://www.nise.go.jp/portal/elearn/choukaku\\_shuwa.html](http://www.nise.go.jp/portal/elearn/choukaku_shuwa.html)
- 大沼直紀「聴覚障害教育の課題——障害保障と情報保障」 Retrieved on March 9, 2010 from [http://www21.big.or.jp/~pcs/ent/oonuma/nanchohoshou\\_johohosho1.htm](http://www21.big.or.jp/~pcs/ent/oonuma/nanchohoshou_johohosho1.htm)
- 大杉豊(1997)「私はこうして英語を学んだ」『聴覚障害』1997年6月号 Retrieved on March 10, 2010 from <http://www.normanet.ne.jp/~ww100114/library/li-11.htm>
- 斉藤くるみ(2009)「英語教育のバリアフリー自習教材の開発」『日本社会事業大学研究紀要』55：39-57
- 須藤正彦(2006)「聴こえにくさの理解とその配慮」札幌学院大学第2回授業の工夫・改善に関するシンポジウム「重度難聴学生達と共に学ぶ環境の構築を目指して」における講演。
- 鈴木薫(2005)「体感言語教育の開く可能性—英語教育における体感振動と学習者の動機付けの関連」 Retrieved on March 10, 2010 from [http://www.bodysonic.cc/lla35\\_suzuki.htm](http://www.bodysonic.cc/lla35_suzuki.htm)
- 座主果林・打波文子(2009)「高等教育のユニバーサルデザイン化における課題——奈良女子大学の聴覚障害学生へのインタビュー調査から——」『人間文化研究科年報』Vol.24：115-126